

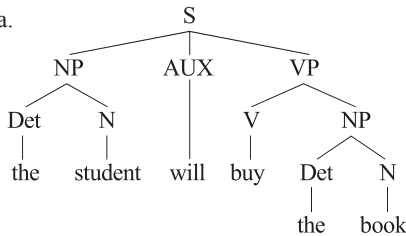
# 分割語彙挿入仮説による機能範疇の出現に関する一考察

石川弓子

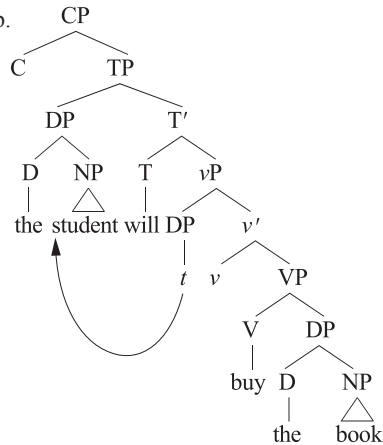
## 1. はじめに

生成文法理論の歴史において、文の構造や句構造に関する分析法は、初期の標準理論（Chomsky 1957）から近年の極小主義理論（Chomsky 1995, 2000, 2001, 2008）にかけて、大きな変遷を遂げてきた。最も大きな変化の1つは、句構造分析の精緻化によって、存在すると考えられている機能範疇が増えたことである。具体的には、標準理論では（1a）のように、文構造には助動詞要素 AUX だけが機能範疇として仮定されていたが、現在では（1b）のように CP と TP があると考えられている。

(1) a.



b.



また、名詞句と動詞句はそれぞれ（1a）のように NP, VP 単独から成るのではなく、（1b）のように、対になる機能範疇と殻構造を成しており、上位に各々、限定詞句 DP と軽動詞句 vP が存在すると考えられるようになっている。

これらの機能範疇は、理論的な変遷の中で、存在するという提案が後発的になされたというだけではなく、古英語、第一言語獲得期の英語には存在しないと考えられることから、現実においても後発的に出現したという指摘がある。また、Cinque (1999) の全ての機能範疇が言語交差的に普遍的であるという主張に反して、現代においても言語によっては機能範疇が存在しないことを示す現象が観察されるという指摘がある。機能範疇についてもう1つ注目すべき点は、v と V, D と N のように、対になる特定の範疇が存在することである。特に Chomsky (2008) は、C と T, v\* と V の間で素性の引き継ぎが行われると主張しているが、なぜ両者の間にそのような依存的な関係があるのか、なぜフェイズ主要部の素性が他の主要部に引き継がれねばならないのかは明らかにされていない。そこで本論は Agbayani and Ochi (2006, 2007) の分割語彙挿入仮説に従って、C と T, v\* と V は別々の範疇として存在しているのではなく、語彙挿入される時点で、1つの語彙の範疇素性と形式素性が別々の位置に挿入されたも

のであると提案する。この提案に従うと、CとT、v\*とVは分割挿入される前は1つの語彙であるからこそ、依存関係を示すことになる。

本論の構成は以下の通りである。2節では、言語発達の初期にある言語と、V2現象が見られるゲルマン系の言語には、機能範疇が存在しないと考えられる現象について論じる。これらの現象は、機能範疇が無い状態とある状態を言語発達の過程の一段階として位置づけたり、言語のバリエーションに関わるパラメーターとして定義づけたりすることによって解決するように思われるが、同一の言語において機能範疇の発現に任意性があるという事実を説明することは出来ないという問題があることを指摘する。3節では、機能範疇と対になる範疇は同一の語彙の素性を分割して挿入したものであると提案し、この問題の解決策を示す。更に、フェイズ主要部からの素性の引き継ぎは、1つの語彙の素性を分割して挿入した結果であると主張する。最後に4節で本論のまとめと今後の課題について述べる。

## 2. 機能範疇の有無に関する言語間の相違

本節ではまず、機能範疇の発達や出現に関する先行研究について論じる。2.1節では、古英語における機能範疇の欠如、2.2節では、言語獲得初期の発話における機能範疇の欠如について論じ、機能範疇の欠如は言語が未発達なためであるという主張を紹介する。2.3節では、英語以外の言語における機能範疇の欠如について論じ、この進化論的な機能範疇の欠如と出現に関する主張には問題があることを示す。最後に2.4節で、1つの言語の中で機能範疇が出現する時と、欠如する時があることに言及し、原理変数理論に基づくパラメーターを仮定しても、この現象は説明できないことを示す。

### 2.1. 古英語における機能範疇の欠如

現代英語では名詞句は限定詞を伴って用いられることから、NPの上位には機能範疇DPが投射しているとされている。しかし、Osawa (2009: 413)によると、古英語では(2)のように、名詞句が限定詞を伴わず、裸のまま用いられる<sup>1)</sup>。

- (2) He                    gefeng þa fetelhilt ...    yrringa sloh    Þæt hire wið halse    heard  
*He (The warrior) grasped that linked hilt-Acc angrily stroke that her with neck-Dat strongly*  
 grapode **banhringas**    bræc **bil**                    eal ðurhwod    fægne flæschoman  
*grasped vertebrae-Acc broke sword-Nom all went through fated body-Acc.*  
 “He (the warrior) drew a linked hilt ... and brought it down angrily to take her by the neck strongly, breaking **the bones**; **the sword** went through the death-doomed body.”

(*Beowulf 1563–1569*, Klaeber 1950: 59)

文中の名詞 *banhringas* (vertebras) と *bil* (sword) は限定詞を伴っていないが、現代英語ではどちらも定冠詞と共に用いられねばならない。この事実から Osawa は、古英語にはDを主要部とする機能範疇は存在しないと主張している。

古英語にも時制はあるため、一見したところTPは存在するように思われる。しかし Osawa (2009: 416) は、現代英語においてTの存在を示すと考えられている現象が、古英語では観察されないことを指摘している。例えば、現代英語では主語は文頭に生起せねばならないのに対して、古英語は(3)が示すように、動詞が文頭から2番目に生起せねばならないV2言語であり、この規則に従っていさえすれば、主語は文頭以外の位置に現れることも可能である。

- (3) Þá    geascode    **he** þone cyning  
*then discovered he the king*  
 “Then **he** discovered the king.”

(*Cynewulf ond Cyneheard 755.10*)

更に(4)では、主語は否定要素、助動詞に後続していることから、動詞句の内部に留まっていると考

えられる。

- (4) ne muge we noht singe þe blisfulle songes

*NEG may we not sing the blissful songs*

“We may not sing the blissful songs.”

(*Peter Chronicle* 55. 763, Haeberli and Ingham 2007: 8)

現代英語において主語が生起可能な位置が文頭に限られているのは、Tが持つEPP素性が動詞句内に基底生成された主語を義務的にTP指定部へ移動させるためであると考えられている。従って、古英語で主語が文頭以外の位置に現れることが許されるという事実は、古英語にTPが存在しないことを示唆している。

また、現代英語の疑問文では、主語と助動詞の倒置やdo-supportが起こるが、古英語では(5)に示すように、これらの現象が観察されない。

- (5) a. Hwæðer ic mote lybban oððæt ic hine geseo?

*whether I might live until I him see*

“Might I live until I see him?”

(*Aelfric Homilies Thorpe* 136. 30, Allen 1980: 789)

- b. Hwæt getacniað ðonne ða twelf oxan buton ða XII apostolas?

*What signify then those twelve oxen except those XII apostles*

“What do those twelve oxen signify other than the twelve apostles?”

(*Pastral Care* 16.105.5, Traugott 1992: 267)

現代英語では、Tの主要部がCへ移動することによってこれらの現象が起こると考えられているため、この事実もまた、古英語にはTPが存在しないことを示している。以上のように、古英語にはDとTが存在しないと考えられることから、Osawa (2009: 411) は、古英語には語彙範疇しか存在しないと主張している。

機能範疇の1つであるTPが導入されたのは、主格主語が義務的に生起するようになった中英語後期であるとHulk and Kemenade (1995) は主張している。その他の機能範疇も中英語後期以降に導入されたとすると、原言語からの通時的な言語発達の過程には、以下のような段階性があることになる。

- (6) a. 原言語から古英語まで：範疇の区別が無い段階  
 b. 古英語から中英語中期：語彙範疇だけから構成される段階  
 c. 中英語後期以降：機能範疇の出現が認められる段階

次節では、第一言語獲得の過程においても上記のような段階性が見られることを示す。

## 2.2. 言語獲得初期における機能範疇の欠如

第一言語獲得期にある2歳前後の幼児の言語使用には、大人の言語使用とは異なる特徴がいくつかあることが指摘されている。例えば(7a)は冠詞、(7b)は所有格の'sを欠いており、子供の言語にはDが欠如していることを示唆している。

- (7) a. Open door. / Want car.

(*Stefan* 19 months, Radford 1990: 84)

- b. Mommy key.

(*Gia* 20 months, holding mother's key, Bloom 1970: 93)

また、(8a)には時制要素、(8b)は助動詞のhasが見られないことから、子供の言語にはTも欠如していると考えられる。

- (8) a. Helen ride

(*Helen* 21 months, Radford 1990: 96)

- b. Biscuit gone. / Car gone.

(*Angharad* 22 months, Radford 1990: 149)

更に、(9a-b)は主語を欠いているが、子供の言語にもTが存在すると仮定すると、EPP素性が満たされないために派生が崩壊すると誤って予測されるため、この事実も、子供の言語にはTが存在しないことを示している。

- (9) a. Go? [=“Where shall I go?”] (Eve 25 months, Brown and Fraser 1963)  
 b. Where helicopter? (Stefan 17 months, Radford 1990: 125)  
 c. Mummy doing? [=“What is mummy doing?”] (Daniel 21 months, Radford 1990)

これに加え、(9a-c)は *wh* 疑問文であるにも関わらず、*wh* 移動や主語と助動詞の倒置が見られない。このような事実から、Villiers et al. (1990: 283) は子供の言語知識にはCが欠けていると主張している。この他、Diessel and Tomasello (1999) は、子供の発話を集めたコーパスである CHILDES (MacWhinney 2000) を用いて5歳1ヶ月までの6人の子供の発話を調べた結果、補文標識の *that* が殆ど全く用いられていないことを指摘し、やはり子供の言語にはCが存在しないと主張している。

以上の事実から、Osawa (2009: 418) は2歳までの子供の言語には機能範疇は存在せず、機能範疇は2歳以降に獲得されると主張している。また、18ヶ月までの1語文発話には文法的な特性が見られないことから、子供の言語獲得の過程を以下の3つの段階に分類している。

- (10) a. 1語文発話段階 (12~18ヶ月): 範疇の区別が存在しない  
 b. 前期複数語段階 (18~24ヶ月): 語彙範疇だけが用いられる  
 c. 後期複数語段階 (24~30ヶ月): 機能範疇が出現する

この第一言語獲得の過程は、前述した通時的な言語発達の過程と類似しており、どちらの過程においても、ある段階から次の段階への移行は、新たな機能範疇の導入と発現によって特徴づけられると Osawa は主張している。

この主張に従うと、機能範疇が欠如していると考えられる言語は発達の初期段階にあり、発達が進んだ言語には機能範疇が必ず出現すると予測される。そこで現存する言語の中で比較的新しいと考えられるクレオールを見ると、下記の例のように補文標識が存在することから、Cが存在していると考えられる。

- (11) a. ai gata **go** haia wan kapinta **go** fiks da fom.  
 I gotta **to** hire one carpenter **to** fix the form  
 b. aen dei figa, get sambadi **fo** push dem.  
 And they figured get somebody **to** push them (東2009: 56-57)

従って、クレオールよりも古くから存在する世界中の全ての言語に、機能範疇が存在すると考えるのが妥当である。この予測に反して、現代においても機能範疇が存在しないと考えられる言語があることを次節で示す。

### 2.3. 他言語における機能範疇の欠如

言語発達の初期段階にある古英語や言語獲得期の英語において、主語が脱落したり、主語が文頭以外の位置に生じたりすることがあると述べたが、英語以外の言語に目を向けると、言語発達の初期段階にあるとは考え難い、今現在使用されている言語においても、これらの現象が観察される。例えば、現代のドイツ語は古英語と同じく、動詞が文頭から2番目に現れねばならない V2 言語だが、下記の例では文頭を副詞が占めているため、(12a)のように主語が動詞に後続する語順は可能だが、(12b)のように、2番目の位置を主語が占める語順は許されない。

- (12) a. Glücklicherweise kaufte **Johann** Socken  
 Fortunately bought **John** socks  
 “Fortunately, John bought socks.”  
 b. \*Glücklicherweise **Johann** kaufte Socken (Bayer 2010: 1)

このことは即座にドイツ語に TP が無いことを意味するわけではなく、例えば文頭の副詞は CP 指定部にあり、動詞がCの主要部にあるとすれば、主語は TP 指定部を占め、EPP 素性を満たしていると考え

ることも可能である。

しかし、ドイツ語と同じく V2 言語であるアイスランド語では、以下の例が示すように、古英語と同様に、主語が助動詞や否定要素に後続していることから、Diesing (1990: 47) や Rögnvaldsson and Thráinsson (1990: 10) などは、主語が VP 指定部に留まっていると主張している。

- (13) Þess vegna hafa ekki verið margin nemendur hér  
*therefore have not been many students-NOM here*

“Therefore, many students have not been here.”

(Wurmbrand 2004: 14)

この主張に従うと、(12), (13) の例は、V2 言語に TP が投射していないことを示しており、古英語や子供の言語と同じ特徴を持っていると考えられる。しかし、ドイツ語、アイスランド語、デンマーク語、スウェーデン語などの、現在使用されているゲルマン系の V2 言語が言語発達の初期である語彙範疇だけから成る段階にあるとは考え難い。また、Osawa (2009: 416–417) は古英語に ECM 構文が存在しないという事実も TP が存在しないことを示していると述べているが、アイスランド語には (14) のように ECM 構文が存在する。

- (14) Við töldum þeim ekki hafa verið hjálpað.  
*we-NOM believed-IPL them-DAT not have-INF been helped*

“We did not believe them to have been helped.”

(Sigurðsson 2012: 192)

従って、これらの言語が発達の初期段階にあるという推測が誤りであることは明らかである。

このような V2 言語と古英語の共通点に理論的な説明を与える方法の 1 つとして、これらの言語においては CP と TP は分化しておらず、代わりに CP と TP を兼ねる句範疇があると Hosaka (2009) は主張している。この主張に従うと、CP と TP の両方がある言語類 A と両者を兼ねる句範疇 FP がある言語類 B の 2 種類があり、言語類 A では名詞句についても、DP と NP の両方があり、動詞句については、vP と VP の両方がある一方、言語類 B では各々両方を兼ねる句範疇 GP と HP のみが存在することになる。そこで、言語類 A か言語類 B かを決定するパラメーターがあると仮定すると、古英語から現代英語への移行はパラメーターの値が変わった、つまり単に使用される言語の種類が変わっただけということになる。また、言語間の差異もこのパラメーターの値が異なるために生じるという説明が与えられる。更に、英語話者の言語獲得の過程における変化は、言語類 B がパラメーターの初期値であり、言語獲得の過程において言語類 A に移行するために生じると考えられる。

以上のように、言語類 A と言語類 B の 2 種類に言語を大別し、その区別はパラメーターの設定値によって生じると仮定すれば、これまで論じた機能範疇の欠如が生じる環境について、問題なく説明が与えられるように思われる。この仮定が正しいとすると、1 つの言語は 1 つのパラメーターの値と一貫した振る舞いをするはずである。次節では、この予測に反して、機能範疇が存在する、即ち、言語類 A に属する現代英語において、言語類 B のような言語現象が観察されることを示す。

## 2.4. 現代英語言語における機能範疇の欠如

2.2 節で、補文標識の出現の有無は、機能範疇 C が存在するか否かの指標と見なされていると述べたが、英語では補文に *that* が出現するか否かは任意であることが広く知られている。*that* の有無が即座に C の存在の有無を示しているとするれば、現代英語は CP を投射する場合と、しない場合があることになり、前節で論じた CP と TP の両方がある言語類 A と両者を兼ねる句範疇 FP がある言語類 B のどちらとも一致しない振る舞いをするため、前節の仮定は誤りであることを示している。

*that* は一般に C の主要部であると考えられているが、Pesetsky and Torrego (2001: 373–374) は T の主要部であると仮定して、この現象を分析している。彼らは、C の解釈不可能素性を満たす方法として、T が C へ移動すると (15a) のように顕在的に *that* が現れるが、TP 指定部にある主語の CP 指定部への

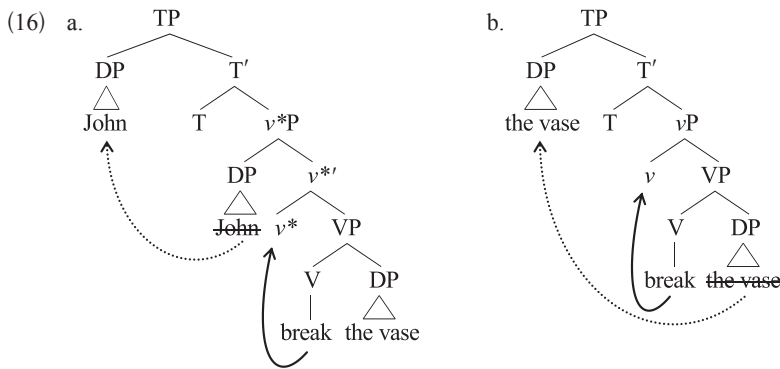


移動によってCの解釈不可能素性が消去される場合は(15b)のようになり、TからCへの移動は起こらないため、thatは生起しないと主張している。

- (15) a. Mary expects [CP [T that]<sub>i</sub>+ C [TP Sue will<sub>i</sub> buy the book]]  
 b. Mary expects [CP Sue<sub>i</sub> [C' C] [TP t<sub>-Suei</sub> [T will] buy the book]]

つまりこの分析によると、Cの解釈不可能素性を満たすために、必ずTから何らかの要素がCへ移動せねばならないということである。このように、本来Tの内部にあるとされている要素が、必ずCがあると考えられる位置で具現化されるのであれば、CとTが別々の範疇として存在し、各々が句範疇を投射していると考えざるを得ない。この必然性があるか否かは疑わしい。

また、動詞句に関しては、対格を付与する他動詞・非能格動詞の場合も、対格を付与しない非対格・受動態の場合も、殻構造をなしており、軽動詞vが投射していると考えられているが、英語の場合、どちらの軽動詞も音形を持たないため、本当に存在しているかは定かではない。しかし、意味的には他動詞・非能格動詞のv\*はVを使役化する役割を担っており、(16a)のようにVがv\*に付加することによって使役の意味と対格を付与する能力を獲得するため、v\*が投射しているという主張には妥当性がある。



一方、非対格・受動態の場合、(16b)のようにVがvに付加しても、vには意味的な貢献がなく、統語的にも格を付与する能力を獲得するわけではないため、少なくとも英語に関して言えば、非対格・受動態のVPの上に機能範疇があるという主張の妥当性は低いと考えられる。

英語以外の言語に目を向けると、(17a)のように使役相を表す軽動詞は顕在的な接辞として具現化していることもあるが、起動相を表す軽動詞は顕在化していない言語も多くある。一方、これとは逆に、(17b)のように使役を表す軽動詞は顕在化しておらず、起動相を表す軽動詞は顕在化している言語も数多く存在する。

- (17) a. モンゴル語  
 使役相: xajl-uul-ax = melt (他動詞)  
 起動相: xajl-ax = melt (自動詞)  
 a. ロシア語  
 使役相: rasplavit' = melt (他動詞)  
 起動相: rasplavit'-sja = melt (自動詞) (Haspelmath 1993: 89)

大半の言語はこのいずれかに分類されることから、使役相・起動相のどちらの動詞句においても必ずvPが投射しているとは考え難く、言語によってどちらであるかは異なるが、いずれか一方のタイプの動詞はvPを投射しないと考えるのが妥当である。

以上のように、現代英語では CP か TP のいずれか一方が投射していないと考えられるケースがあること、vP は動詞のタイプによって投射しない場合があると考えられることが明らかになった。また、英語以外の言語においても同様に、vP は常に投射するとは考え難く、その言語によって使役相、起動相どちらか一方の意味を表す軽動詞のみが機能範疇として存在している可能性が高いと考えられることが明らかになった。従って、前節で論じたように、言語を語彙範疇しかないタイプと機能範疇が発現するタイプの 2 種類に分けて分析することは困難であるという結論が得られる。そこで次節では、機能範疇の出現について、本節とは異なる分析法を提案する。

### 3. 分割語彙挿入仮説と機能範疇

機能範疇について分析する上で考慮せねばならない特性として、歴史的な発達、言語獲得における発達、言語間の相違などを観察すると、出現する場合としない場合があるということを見てきたが、もう 1 つ考えねばならないのは、機能範疇は各々、自身と異なる何らかの範疇と密接な関係にあるということである。例えば、D は N しか補部としてとることはないし、T は必ず v を補部とするが、その逆は起こり得ない。それに対して、語彙範疇は補部をかなり自由に選択することが可能で、例えば V は NP, PP, TP, PP のどれでも補部としてとることが出来る。

Grimshaw (1991) は、このような機能範疇と語彙範疇の非対称性から、機能範疇とそれと密接な関係にある語彙範疇のペアは同じ範疇素性を共有し、機能範疇は同じ範疇素性を有する語彙範疇の拡大投射であるとする拡大投射理論を提案した。この提案に従うと、例えば D は N、v は V と同じ範疇素性を持つことから、それぞれ N と V の拡大投射ということになる。また、T と C が持つ機能素性は異なるが、V と同じ範疇素性を共有する V の拡大投射であると提案している。

この提案は特定の機能範疇と語彙範疇が対になっているかのような強い結びつきを示すという事実を説明することは可能だが、2 節で論じた機能範疇の分布について説明を与えることは困難であると思われる。また、音声と意味に関わる各能力、すなわち構音・知覚に要請される感覚・運動システムと、意味・指示に要請される概念・意図システムに要請されるメカニズム以外を全て排除することを目標としている極小主義理論の枠組みにおいて、拡大投射という概念がどのように機能するのか定かではない。

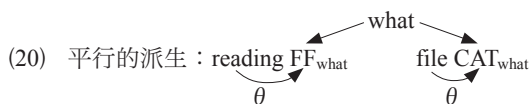
そこで、これに代わる枠組みとして、Agbayani and Ochi (2007) の分割語彙挿入仮説を用いて機能範疇の出現に関する現象を分析することを提案する。分割語彙挿入仮説とは、下記のように、語彙挿入の時点において 1 つの語彙の形式素性と範疇素性が分割され、異なる位置に外的併合されることがあるという仮説である。

- (18) Separation of FF (formal features) and CAT (categorical feature) takes place in the course of lexical insertion/External Merge as well. (Agbayani and Ochi 2007)

この仮説を下記の寄生空所構文の例を用いて、具体的に説明する。

- (19) What did you file *e* without reading *e*?

通例、1 つの限定詞句には 1 つの意味役割しか与えられないが、この例文においては、*what* が *read* と *file* の両方から意味役割を得ている。これは、彼らの提案によると、英語では形式素性と範疇素性のどちらもが個別に意味役割を得ることが可能であるため、1 つの語の形式素性と範疇素性を (20) のように、2 箇所  $\theta$  位置に分割して挿入したためである。



これらの素性は、分割されたままでは PF で発音することが不可能なので、形式素性が範疇素性の位置

へ移動する。従って (19) の例の場合、まず (20) のように *what* の形式素性と範疇素性が分割されて挿入された後、平行的に派生した2つの部分が (21a) のように併合し、更に (21b) のように *what* の形式素性がCに牽引されてCP指定部へ移動し、最後に (21c) のように *what* の範疇素性がPFでの欠陥を起こさないためにCP指定部へ移動する。

- (21) a. you file CAT<sub>what</sub> [without reading FF<sub>what</sub>]  
 b. FF<sub>what</sub>-C you file CAT<sub>what</sub> [without reading FF<sub>what</sub>]  
 c. CAT<sub>what</sub> FF<sub>what</sub>-C you [<sub>v\*P</sub>(CAT<sub>what</sub>) [<sub>v\*P</sub>(you) file (CAT<sub>what</sub>) [without reading (FF<sub>what</sub>)]]

Ishikawa (2009) は、結果構文や描写構文も分割語彙挿入によって派生していることを示しているが、上述した寄生空所構文の例を含めて、分割語彙挿入が適用されると提案されているのは、1つの限定詞句が2つ以上の意味役割を得ている例に限られている。しかし、原理的な説明がない限り、分割語彙挿入は限定詞句以外にも適用することが可能なはずである。

そこで本論は、(22) のように、機能範疇などの主要部の範疇素性と形式素性は分割語彙挿入によって、異なる位置に挿入することが可能であると提案する。

- (22) [CAT<sub>C</sub> FF<sub>C</sub> [CAT<sub>v</sub> FF<sub>v</sub>]]

この提案に従うと、Cの持つ素性のうち、分割された範疇素性CAT<sub>C</sub>はCの位置に挿入され、形式素性FF<sub>C</sub>はTの位置に挿入される。同様に、vの範疇素性CAT<sub>v</sub>はv、FF<sub>v</sub>はVに相当することになる。CからT、vからVに素性の引き継ぎが起こっているとChomsky (2008: 143) は主張しているが、引き継ぎとはどのような操作であるかが明らかではないし、なぜ引き継ぎが起こらねばならないのかは不明である。一方、この提案に従うと、同じ範疇の素性を分割して挿入しているために、あたかも素性の一部を引き継いだかのように見えるだけであるという説明が可能になる。

この提案に従って、2節で論じた機能範疇の欠如と出現について再考すると、古英語、第一言語獲得期の英語のように、機能範疇が出現していないと考えられるケースでは、素性が分割されずにひとまとまりで一か所に挿入されており、現代英語のように機能範疇が出現していると考えられるケースでは、分割語彙挿入によって素性が異なる位置に挿入されていることから、独立した投射が個々に存在しているような現象が見られることになる。また、先の寄生空所構文の分析に従えば、FF<sub>C</sub>、FF<sub>v</sub>に音形がない場合は、PFにおける欠陥を避けるために、(23) のようにCAT<sub>C</sub>、CAT<sub>v</sub>への移動が義務的に起こることになる。

- (23) [CAT<sub>C</sub> FF<sub>C</sub> [CAT<sub>v</sub> FF<sub>v</sub>]]

このように、CからT、Vからvへの主要部移動についても、分割語彙挿入を仮定することによって説明が与えられる。

以上のように、機能範疇の欠如と出現に原理的な説明を与えただけではなく、機能範疇と対になる範疇との間の素性に存在する選択的な関係や、引き継ぎを含む密接な関係性がなぜ存在するのか、更には主要部移動がなぜ起こらねばならないのかを分割語彙挿入仮説によって明らかにした。

#### 4. 結 語

本論は、限定詞句に限らず、全ての範疇の範疇素性と形式素性は分割して挿入することが可能であると仮定することによって、機能範疇の欠如と出現に関する歴史的な変遷、第一言語獲得期における変遷、言語間の相違などについて原理的な説明が与えられることを示した。更に、機能範疇であるフェイ



ズ主要部C,  $v^*$  から, これらと選択関係にあると考えられているT, Vに素性の引き継ぎが起こっているかのように見えるのは, これらがそもそも同じ語彙の素性を分割挿入したものであることに起因することを示した。

更に, Chomsky (2008) はフェイズ主要部の素性は, 同一のフェイズ内において自身が選択した全ての主要部に引き継がれると主張しているため, 分割語彙挿入の際に形式素性がコピーされ, 複数の箇所と同時に挿入される可能性があると考えられる。この場合, PFでの欠陥を避けることは可能なのか, 可能であるとすれば, 具体的にどのようなことが起こるかを検証する必要がある。また, 強フェイズではないとされている非能格, 受動態の $v$ では, 分割語彙挿入がどのように関わるかも今後の研究課題としたい。

#### 注

1) 以降の例文中の下線や囲みなどは全て, 筆者による。

#### 主要参考文献

- Agbayani, B., and Ochi, M. (2006). Move F and PF/LF defectiveness. In Boeckx, C. (Ed.), *Minimalist essays* (pp. 19–34). Amsterdam: John Benjamins.
- Agbayani, B., and Ochi, M. (2007). *Feature splitting under external merge: Some theoretical and empirical consequences*. Paper presented at Osaka University, December 9<sup>th</sup>, 2007.
- Cinque, G. (1999). *Adverbs and functional heads: Cross-linguistic perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Chomsky, N. (1995). *The minimalist program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (2000). Minimalist inquiry: The framework. In Martin, R., Michaels, D., and Uriagereka, J. (Eds.), *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik* (pp. 89–156). Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (2001). Derivation by phase. In Kenstowicz, M. (Ed.), *Ken Hale: A life in language*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (2008). On Phases. In Freidin, R., Otero, C. P., and Zubizarreta, M. L. (Eds.), *Foundational issues in linguistic theory: Essays in honor of Jean-Roger Vergnaud* (pp. 133–166). Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Diessel, H., and Tomasello, M. (2000). Why complement clauses do not include a that-complementizer in early child language. *Proceedings of the 25th annual meeting of the Berkeley Linguistics Society* (pp. 86–97).
- Haerberli, E., and Ingham, R. (2007). The position of negation and adverbs in early middle english. *Lingua*, 117, 1–25.
- Haspelmath, M. (1993). More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In Comrie, B., and Polinsky, M. (Eds.), *Causatives and transitivity* (pp. 87–120). Amsterdam: John Benjamins.
- Hosaka, Y. (2009). Notes on functional categories in German. *English Linguistics*, 26, 460–475.
- Ishikawa, Y. (2009). Split lexical insertion hypothesis: A case study of secondary predicates. *JELS 26: Papers from the twenty-sixth conference of the English Linguistic Society of Japan*, 71–80.
- Osawa, F. (2009). The emergence of functional categories in the history of English: Ontogeny and phylogeny in language. *English Linguistics*, 26, 411–436.
- Pesetsky, D., and Torrego, E. (2001). T-to-C movement: Cause and consequences. In Kenstowicz, M. (Ed.), *Ken Hale: A life in language* (pp. 355–426). Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Sigurðsson, H. Á. (2012). Minimalist C/case. *Linguistic Inquiry*, 43 (2), 191–227.
- Villiers, J. D., Roeper, T., and Vainikka, A. (1990). The acquisition of long-distance rules. In Frazier, L., and Villiers, J. D. (Eds.), *Language processing and language acquisition* (pp. 257–297). Dordrecht: Kluwer.